

(五) 山持(ざんもち)

西林木町霊雲寺前から前組町内以東・東林木町馬場あたりまでの地帯を「山持」といいます。

昔 伊努谷川が南流していた頃、伊努谷川の流れが形成した扇状地の東平坦地(「古土手」以東)を「山持」と言ったようです。また、東林木町の「青木」地帯から「登立」を通っている通称「山持川」は、西林木町の「山持」地域に流れるため「山持川」と名付けられたものと思われます。

最近この「山持川」の周辺においては国道四三二号バイパス事業に伴って発掘調査が行われましたが、扇状地のかかりの部分は中世以降の土石流の堆積で形成されたものである事がわかりました。

また、斐伊川が西流していた弥生時代から近世にかけての山持周辺には大規模な集落の跡や水田・畑の跡が見つかっています。

出雲国風土記に明記されている「伊努神社」の社地は「山持」の中ほどにあり、国引きした八束水臣津野命(別名・意美豆努命)の子「赤衾伊努意保須美比古佐和気農命」が祀ってあります。

出雲国風土記の冒頭にある国引きでは、まず新羅の三崎を、ついで北方の佐伎国、余波国を引き、そして高志の都都(珠州)の三崎を引いて、杵築から美保関までの島根半島をつくつたと記述されています

その国引きで島根半島を最初に引き寄せつながつた地点が、「伊努の郷」という話しが伝えられています。

おそらく、北山の伊努谷川から流れ出た土砂の堆積と斐伊川から流出した土砂の交合作用で本州とつながり造成されたものと思えます。

「赤衾伊努意保須美比古佐和気農命」は別名 大州見彦(オオスミヒコ)と呼ばれ、大きな砂州を監視するという意味だそうです。

このような伝説や記述から地名を推定すると「山持」は砂や土が「山のように積もった」という意味。

即ち「山積もる」・・・

「やまつもり」・・・

「やまもち」・・・

「山持」・・・と

呼ばれるようになった

のではないかと古老が

話してくれました。

